

日本タバコ会社 連載 3

作戦会議

佐伯は、朝から忙しかった。総務部と一緒にあって、今日の会議の準備に追われている。権藤の発案で、常務以上が集まって、NTSの将来を議論する会議が三ヶ月に一度の頻度で開かれることになった。

権藤は、とんでもないことを役員会で宣言した。

それは、財産省からの天下り社長は自分が最後だということである。煙塩販売公社時代に入った人間も育っている。NTSの社員は公社から、そのまま移籍して来ている人間が多い。次期社長は、役人OBではなく社員から登用すると権藤は宣言したのだ。

当然、財産省からは猛烈な反発が起こった。そこで、権藤はマスコミを使って、財産省が民間企業の人事に容喙しようとしているとして、その横暴を非難した。

マスコミは権藤の味方となった。ただでさえ、天下りは世間の話題となっている。国が抱えている莫大な借金の元凶が天下りと指摘する学者も多い。財産省に勝ち目はなかった。

しかし、佐伯は、これは権藤の巧みな人身掌握術のひとつと考えている。いままでのように、社長が財産省の意向で決まっていると、権藤には何の権力もないことになる。

一方、次期社長を社内から登用するとなると、その指名には権藤の意向が大いに働く。当然、社内人間は権藤の言うことを聞くしかない。

さらに、別な狙いもあるのではないかと佐伯は考えている。

NTS社長の任期は、社長になった人間の事務次官在任期間と連動している。これにならえば、権藤は三年で社長を退任せざるを得ない。後任には、権藤のつぎに事務次官になった金井と決まっている。しかし、権藤が役人OBの起用を拒否したことで、権藤の任期が大幅に伸びる可能性が出てくるのである。

権藤発案のNTS将来委員会も、権藤が次期社長を選ぶための意見交換会であると考えている人間も多い。つまり、権藤の品定め会である。したがって、次期社長を目指す人間にとっては、今日の会議が重要な試金石となっているのだ。

権藤は、どんどん若い人材も登用すると発言している。つまり、常務以上に適当な人材がいなければ、それよりも若い連中から社長を選ぶといっているのである。いまのところ、次期社長の最右翼に居るのが、専務の品川欣司である。佐伯のいまのポストと同じ社長室長を三年ほど務めたあと、取締役人事部長となった。佐伯には、品川のような野望はないが、できれば役員の一角に加わりたいたいと思っていた。

実は、よく知られていないが、一般の大企業では、役員になるのとならないのでは、生涯賃金で大きな差が出る。まず、役員になった時点で、かなりの退職金を受け取ることができる。あとの賃金は契約となるが、これが一般社員の年収よりも、はるかに高い。さらに、平の取締役から常務、常務から専務、専務から副社長と役職が上がるたびに退職金が

貰える。よしんば、役員を退任したとしても、再就職先が約束されている。

品川以外の役員は、可もなく、不可もなくというイエスマンで、自分の意見を表明しないものが多い。権藤の発言にうなづくばかりで、自分のビジョンというものを持っていない。

今日の会議の主題は、NTSの主力商品は、今後もタバコでよいかどうかとであった。

「品川君の意見はどうだ」

権藤は、品川の意見を求めた。権藤としても、品川に一目置いている。

「もちろん、多角経営は重要かとは思いますが、NTSの主力製品はタバコであり続けると思います」

「ほお、そう思うか。しかし、タバコに対する世の中の目は厳しくなるばかりだぞ。それでも、タバコに固執するというのか」

「社長。お言葉ですが、規制が厳しくなったからといって、売り上げ自体は、落ちておりません」

権藤は、そんなことは知っていたが、あえて品川に聞いてみた。

「売り上げが落ちていない。それはどういうことだ」

「その要因にはふたつあると思います」

「それでは、品川君の意見を聞いてみようか」

「はい、かつて、タバコの販売は、煙塩販売公社の認可を受けた小売店に限られていました」

「そんな時代もあった」

「しかし、いまではスーパーやコンビニでもタバコを自由に買うことができます。つまり、かつてに比べて、はるかにタバコを入手しやすくなったということです。民営化後は、さらに、この傾向が強まっており、街にはタバコの自動販売機があふれています」

「なるほど、かつてより、ずっとタバコが買いやすくなったということか」

「その通りです。そのおかげで、表には出せない効果もあります」

「表に出せない効果？」

「はい、それがふたつめの要因となっているのですが、未成年者の喫煙率の増加です。どこでも、いつでもタバコが買えるようになったおかげで、未成年の喫煙量が増えているのです。あわせて言えば、女性の喫煙の増加にもつながっています」

「女性の喫煙者も増えている？」

「ええ、かつてタバコが専門店でしか買えない時代には、女性にも抵抗があったと思われます。やはり、タバコを買う時には、女性は後ろめたさを覚えます。それが、誰にも見られずに買えるのですから、なんら抵抗がありません。この要因は大きいと思います」

「なるほどな。男は吸わなくなったが、女がその分吸っているという計算か」

「女性の喫煙が増えた理由として、タバコがダイエットに利くという噂が流れたのも大きいと思われます」

「確かに、タバコをやめれば太ると言われている。ところで、タバコにダイエット効果があるというのは科学的に証明されているのかね」

「いえ、そんなことは決してありません。むしろ女性にとっては、肌のおとろえがはげしいので、マイナス効果しかありません。しかし、タバコ会社としては、ダイエットにきくという噂をあえて否定する必要はないかと思います」

権藤はうなずいた。

「たしかに、未成年の喫煙が増えているというのは、正式な一般向けの発表には出てこないことだな」

「その通りです。未成年は統計上吸わないことになっていますから」

佐伯もそのことは、いつも疑問に思っていた。法律上、禁止されている一〇代の喫煙は、きちんとした統計データになっていないのである。

しかし、ある調査によると、高校生の実に六割以上が喫煙を経験しているという。

「確かに、喫煙率の調査対象になるのは、二〇歳以上の成人ばかりだ。それが、わが社の追い風になっているとは皮肉だな」

「しかし、われわれとしても安閑とはしておられません。自動販売機に対する風当たりが強くなっています」

「それは、ある程度は仕方がないだろう。ただし、自動販売機の完全撤去ということにはつながらないはずだ」

「何とかそれだけは阻止したいと思っております。さらに、これはオフレコですが、若年層の喫煙行為は、より強い中毒症状を喚起するといわれております。彼らは、わが社にとって、大切な潜在顧客となるわけです。法律違反を放置しているという意味では、後ろめたい気がしないわけではありませんが」

「品川君。そこは考えようだよ」

品川は怪訝そうな顔をして権藤を見た。

「これもオフレコだが、世の中には役立たずの人間が山のようにいる。将来にわたって世間に迷惑をかける。

そんな連中は大概、法律を平気で破るし、二〇歳前で喫煙するだろう。そういう連中には、せいぜいタバコを吸ってもらって、はやく世の中から消えてもらう。

表立っては言えないが、タバコには、そういうプラスの面があるということを政治家に訴える必要があると思っている」

実は、NTS 将来委員会のメンバーには喫煙者はひとりもいない。どれだけ、喫煙が身体に悪いかを十分、熟知した連中であるからだ。

人体実験

佐伯のもとに、同期の広報課長の篠原から電話が入った。

「おお、佐伯か。どうしている。元気か。あのワンマンのお守りも結構、大変だろう」

「おい、社内の電話で社長のことをタワケと呼ぶのはよせよ」

「佐伯、お前こそ気をつけた方がいいんじゃないか。俺は、社長がタワケなんてひとつも言っていないぞ」

N T S社員は、以前から、財産省からの天下りをタワケと呼んでいる。その名の通りである。タバコに関する知識はおろか、会社運営の何たるかも全く分かって居ないものが、突然、会社のトップになる。

会社の金を無駄遣いするためだけにいる存在で、N T Sにとって何の役にも立たないことをみんなが知っているからだ。

しかも、ノーパンしゃぶしゃぶで接待を受けてきたような連中であるから、セクハラも多い。秘書が怒って、何人辞めていったことだろうか。中にはスカートに手をつっこむのを

「朝の挨拶」

と豪語していたバカも居た。

ただし、佐伯は、権藤に対しては、いままでの天下りとは、別な印象を持っていた。過激な発言も多いが、嫌われ者になりつつあるN T Sを根底から変えられるかもしれない。そんな期待を抱かせる人物である。

佐伯が黙っているのを、篠原は

「今日、電話したのは、他でもない。慰労退職金の水増しの件だ」

佐伯には、篠原の話がピンときた。

「また、肺がんにでもなったのか？」

「実は、その通りなんだ。だから、早期退職勧奨制度にプラスアルファでよろしく頼む。家族に対しての十分なケアも必要だろう」

「仕方がない。分かった。しかし、社長には報告できないな。社長が言う通り、こんなことはもうやめたらどうだろう」

「それが、できれば簡単だが、広報としてはそうもいかない。なかなか微妙で難しいところなんだよ」

N T Sには、喫煙が人体に及ぼす影響について研究している部署がある。本来は、N T S基礎研究所に所属すべき部署であるが、昔からの経緯で、広報部に属している。

N T Sの前身は、日本煙塩販売公社である。もともとは、財産省の煙塩販売局であったが、それが、公社化され、二〇年ほど前に民間会社となった。

公社時代に、タバコが健康に及ぼす被害が叫ばれ出し、アメリカやヨーロッパを中心に、タバコに対する規制が始まった。公社としては、吸い過ぎない限り、タバコは人体にまったく害を及ぼさないという見解を表明していたが、なんらかのかたちで、それを証明する必要がある。

そこで、発足したのが、喫煙調査室である。この調査室には、研究員が五人ほど配置され、朝から晩までタバコを吸っている。煙塩公社としては、これだけタバコを吸っても、

健康には悪影響がないということを証明するために設置した部屋である。

調査員を公社職員から公募したところ、一〇〇人近くの応募があった。何しろ、仕事をせずに、一日中タバコを吸ってさえいればよいという仕事である。こんな楽な仕事はないとみな思ったに違いない。公社は、健康診断で、まったく問題のない頑強な五人を選んだ。

かくして、公社の将来は、この健康な五人に託された。

しかしながら、五年もしないあいだに、ほとんどの人間がなんらかの病気で身体を壊してしまった。これには、公社もあわてた。鳴り物入りではじめた実験である。それが、このざまではしょうがない。広報室では、この実験の模様をマスコミに取材させ、みんなが元気であることを宣伝しようと考えていた。しかし、結果は悲惨である。

仕方なく、調査室には、表部隊と裏部隊が作られることになった。表部隊は、交代制である。マスコミ取材の時には、部屋に一日こもりっきりとなって喫煙しているが、普通の日は、普通の職場で働いている。

一方、裏部隊の人間は、本当の人体実験対象者である。もちろん、マスコミには報告できないし、学会発表などもってのほかである。

その後の調査で、副流煙に有害物質が多く含まれることが明らかとなった。調査室では、裏部隊の五人の男が陣取って、朝から晩までタバコを吸っている。当然、部屋中は煙でもうもうとなり、五人は他人の吐いた毒を吸収することになる。そこで、公社は、五人を個室に移すことになった。もちろん、排煙装置も完備させてある。

その結果、前よりは減ったものの、やはり調査員は、すぐに病気になった。公社の意に反して、喫煙は健康障害をもたらすということを証明したことになる。

しかし、この事実を世間に公表することはできない。かと言って、実験を中止すれば、世の中から非難されるのは目に見えている。公社は、実験を続行した。

そして、この調査室はそのまま民営化後のNTSに引き継がれた。

さらに十年ほど前から、より深刻な事態となった。かつての調査室の室員たちが、肺がんでばたばたと倒れていったのである。

広報室には、門外不出の資料として、肺疾患で志望した室員の肺の解剖結果が残されている。ほとんどの人間の肺の表面は、黒く変色し、タールやすすで覆われている。しかも、肺内部も真っ黒で、ほとんどの肺細胞が壊死した状態であった。おそらく最後は、呼吸ができなくなって、苦しみながら死んでいったのであろう。

NTSは、病気になった調査室員や、肺がんで死亡したものたちの家族に手厚い保障を行った。通常の満期退職金の三倍近い金を払い、さらに、死後も会社独自の年金制度による補償も行っている。子供が大学を出るまで、奨学金も給付した。

篠原が電話をしてきたのも、元調査室員の件である。五年ほど前より体調を崩し、会社を休んでいたが、最近の診断で、重度の肺がんで、余命二年という診断を受けたらしい。まだ、五十六歳であるが、会社は早期退職勧奨制度を適用し、さらに手厚い補償を家族に申し出たいと言っているのだ。

昔からの経緯で、広報室が担当となっているが、部屋の予算を使って、このような保護はできない。公社時代は、金がうなるようにあったので、いくらでも捻出できたが、民営化されるとそうもいかない。

会社の使途不明金の中から、エクストラの補償分は捻出されていた。代々、社長室がこれを取り仕切っていたのであるが、権藤の時代になって風向きが変わった。権藤は、そんな余分な金を払う必要はないと言い出したのである。

広報室は慌てた。いままで、隠しに隠してきた裏の情報が、へたをするとマスコミに流れかねない。そうすると、今の広報室だけでなく、過去の人間の責任問題となる。手厚い保護があるからこそ、家族も事実を黙秘してくれているのであって、それがなくなったら、マスコミにリークするものも当然出てくるだろう。

篠原はひとりごちた。

「昔の連中がやった失敗を、われわれが尻拭いするというのも変な話だが、ここまで来てしまったら、秘密は守り通すしかない」

「ところで、調査室での実験だが、もう終わりにしたらどうなんだ」

「とっくにやめているよ。表向きは、まだ、実験を続けているように繕っているが、すでに五年前に閉鎖している。実験を続けようと思っても、応募してくる人間がもういないんだ。NTSの人間なら、タバコがどれだけ身体に悪いかということは、みなよく知っているからね」

「そうか」

佐伯は、時代が変わったことを知った。

実は、NTSでは、完全分煙が行われている。喫煙スペースは、完全には排煙設備も整っている。喫煙を放置していたら、将来、保険で支払う金額が膨大なものになる。民営会社として、当然の措置である。

NTSにある内部資料によると、喫煙者と非喫煙者の仕事の能率の違いについても書かれている。喫煙者は、体内のニコチンが消えてくると、急に集中力を失い、仕事の効率があくんと落ちる。作業を取り違えたり、計算を間違える確率も高くなるので、会社に損害を与える可能性も高い。

しかも、ニコチン補給のために、作業をストップして、喫煙室に行くので、実質作業時間も非喫煙者に比べて、かなり短くなる。喫煙者の給料を安くしろという議論も出ているほどである。

佐伯はためいきをついて

「よく分かった。その分は、社長室の予算から、なんとか捻出してみよう。しかし、これが社長にばれたら大変なことになる。広報室の役員から、社長を説得して予算を正式に認めてもらうよう働きかけて欲しいんだが」

すると篠原は

「あの社長は頑固だからな。自説は覆さない。たとえ、数多くの人間に迷惑がかかろうと

も気にしないんじゃないか」

「しかし、社長は、もう一期勤める気である。さらに三年となると、今回のようにごまかしきれぬかどうか不安だ」

「ああ、財産省からの天下りを拒否した件だ」

「うん。あの判断はマスコミ受けしている。何しろ、世間でとかく非難の多い天下りを永遠にやめるというんだからな。だが、実際は、自分の社長の地位を安泰にさせようというのが本音だ。何しろ、自社から社長を選ぶとなると、自分に任命権も生じる。もう一期、社長を務めたあと、会長として実権を握る。見事な作戦だよ」

「確かにな。昔だったらNTSの社長を辞めても、どっかの財団の理事長を務めて、がっぽり金を稼げたが、いまでは、そういう甘い口はどんどん少なくなってきた。会長の後は、顧問としてNTSに骨をうずめるというのは、いい考えかもしれない」

「だからこそ、社長には、このことを了解してもらいたいんだ」

「佐伯、心配するな。権藤社長は今季限りだ」

「本当か」

「ああ、財産省だって、黙っていない。権藤のやりたい放題ではしめしがつかない。与党の国会議員を使って、権藤を代表権のない会長に押し込める予定だ」

「それは、実現性の高い話なのか。社長は、大物の国会議員とも会っているぞ」

「そう、心配するな。それよりも、お前は、今回のことをまるく納めてくれ。それが至上命題だ。へたに家族に騒がれたら、社長の交代劇だけの話では済まされない。NTS自体が大きな被害をこうむることになる。当然、お前や俺も無傷というわけにはいかない。そのことを肝に銘じておいてくれ」

佐伯はため息をついた。先輩たちの失敗を、自分たちが尻拭いする。なんとも、損な役回りだ。いっそのこと、自分から権藤に話してみようか。しかし、その考えは捨てた。あの頑固な権藤が、自説を覆すとは到底思えない。

日本平和財団

金井信吾は、日本平和財団の理事長室で、財産省の後輩たちに、かたっぱしから電話をかけまくっていた。本来ならば、あと一年で、自分はNTS社長に就任するはずである。この三流財団の理事長に甘んじているのも、いずれは、NTSに天下りできるという約束があったればこそである。

ところが、現NTS社長の権藤がとんでもない宣言をした。今後は、自社の生え抜きを社長に抜擢するというのである。財産省支配を拒否したことになる。自分が財産省出身のくせに、よくもそんなことが言えると腹立たしい限りであるが、なぜかマスコミは、権藤の発言は歓迎している。

金井は、権藤のあとをついで財産省の事務次官に就任した。実は、権藤は金井よりも一歳下の田野倉を次官に押ししていたのだが、当時の、政権の混乱が金井次官誕生を実現した。

金井は、東都大学の経済学部出身である。それまで、財産省では、東都大学の法学部出身者以外で次官になったものはいなかった。金井も当然、自分は次官にはならず、局長から外部の組織に転身するものと思っていた。

ところが、当時の与党の民自党が分裂し、新しい政権が発足した。そして、そのあおりで、財産省内でのスキャンダルが表にでることになった。銀行や証券、保険会社との癒着など、連日、マスコミで報道されることになり、逮捕までは至らなかったものの、財産省の主要なポストを占めていたライバルたちはすべて失脚した。そして、主流からははずれたポストに居た金井に白羽の矢がたったのである。

一度、野党に転落した民自党であったが、政権党内での抗争につけいり、いまでは、再び、与党に返り咲いている。結局、財産省の事務次官のポストは、ふたたび東都大学法学部出身者の指定席となっている。そういう意味では、金井は事務次官OBとしては、かなり不遇なポストを渡り歩いてきた。一度は、高利貸しのアイフルーツの副社長というポストも押し付けられそうになったが、何とか断った。

しかし、そんな金井でも、NTSの社長ポストだけは確実に見られていた。というのも、慣例をくずしたのでは、財産省としても、秩序が保てなくなるからだ。事務次官経験者は、いくつかの天下りポストを経て、最後はNTS社長になる。それが不文律であった。

金井は電話でどなっている。

「吉本君。権藤の我が儘を許していたら、財産省は大事な天下りポストを永久に失うことになるんだぞ」

吉本は、財産省の官房長であり、OBの就職のお世話係である。金井は、事務次官にも電話を入れて、このままでは、あなたの将来のポストも危うくなると警告しておいた。経済学部出身の次官OBということで、後輩に対する遠慮もあったが、今回の件だけは、とても了承することはできない。

「金井理事長、この件は、われわれも憂慮しております。しかし、マスコミはこぞって、権藤社長の発言を歓迎しております、なかなか苦戦しております。しばらくは、静観するしかないというのが現状です」

「しかし、だまっていたら、権藤は、勝手に人事を決めてしまうのではないのかね」

「NTS社内にも、われわれのシンパはたくさん居ます。今回の件は、NTSの将来を思っただけというよりも、自分の地位の延命策ではないかと、多くの社員は疑っております」

「しかし、権藤は、将来のポストをえさに、すでに、かなりの数の役員を手なずけたと聞いておるぞ」

「この件は、与党の先生方にも相談しておりますので、しばらく、ご辛抱ください」

吉本はそう言うと電話を切った。

金井は舌打ちした。もし、自分が法学部出身であったならば、後輩たちも、もう少し丁寧な対応をしていたであろう。あいつらの魂胆はみえみえである。ここは、とりあえず権藤のわがまを聞いて、もう一期を権藤にまかせる。

そのうえで、次期社長のポストは、金井のつぎの次官OBに与える。つまり、一期だけは仕方がないという考えである。

金井は、つぎの相手に電話をかけた。現与党の金融大臣だ。実は、大臣の相川は高校の後輩である。金井は東都大学に入ったが、相川は慶賀大学の経済学部に入った。では、あまりよくなかったが、持ち前の政治力で、論客としてどんどん頭角を現し、慶賀大学の教授の時に、現総理大臣の目にとまり、政治改革大臣として登用された。金井は、高校の後輩ということもあって、いままで、相川のことはずいぶんと可愛がってきたつもりである。

しかし、大臣秘書は、多忙につき、すぐには取りつげないと言ってきた。どいつもこいつも自分をバカにしている。金井は毒づいた。

その時、秘書が部屋に入ってきた。

「理事長。ナビア共和国の方が、先ほどからお待ちです」

思わず、そんなやつは返してしまえと叫びそうになったが、我慢して、あうことにした。どうせ、陳情に決まっている。

ナビア共和国は、アフリカの小国で、最近、民主政権が誕生した。政情は不安定であるが、なんとか外国の支援を受けて、国家を再建しようとしている。

金井が勤める財団は、政変などで貧困にあえいでいる難民救済や、国家支援のための金を配る役割を担っている。しかし、財団は単なる天下り組織で、職員の数よりも天下り役員の数の方が多い。

役員には、個室と秘書と自家用車が与えられているが、本来の財団の仕事などしたこともない。もちろん、毎年、入ってくる補助金の金額も決まっており、外国に配る支援金の額を決める権限は役員にはない。すべて、政治家が差配している。

本来ならば、この財団は、外国省の管轄であるが、予算もからんでくるため、財産省から代々理事長を受け入れている。しかし、金井のような事務次官経験者が天下るような立派な組織ではない。理事長でも、年収は三〇〇〇万円足らずである。

役得といえ、ハイヤーが自由に使えることと、年の交際費が二〇〇〇万円ほどあることだ。今夜も役人OB仲間の会合が入っている。天下国家を論ずる懇談会とは銘打っているが、実際には、単なる飲み会である。

先日、驚いたのは年金企画財団に天下った友人が、一晩で二〇〇万円を銀座で使っていたことだ。そんな豪遊は、自分のような貧乏財団の理事長には、とてもできない。

年金関係の財団は金が有り余っているらしい。自分も、年金系の財団に行けばよかったと、今では後悔している。実は、その可能性もあったのだが、昨今の、年金運用に対する厳しい世間の目を考えて躊躇してしまったのだ。

年金は、なにしろ集まっている金額がとてつもなく大きい。いくらでも、国民の目をごまかして甘い汁を吸うことができるのだ。何しろ、資金運用で五兆円の穴を開けても、誰も文句を言わない世界である。もともと、政治家は、役人と一緒になって、甘い汁を吸お

うとしているだけで、年金財源を将来のために生かそうなどという発想のない連中である。

ナビア共和国の代表は、流暢な日本語で、金井に懇願してきた。

「金井先生の権限で、わずかな額でも結構ですから、わが国の民主政権を助けていただくわけにはいかないでしょうか」

「ニチワカさん。わたしとしても、何とかしてあげたいのはやまやまなのですが、当財団の予算はすべて年度はじめに決まっています。理事長といえども、簡単に自由にできるものではないのです」

「しかし、政治家の方に聞きましたら、一〇〇〇万円くらいは理事長の裁量で、自由になるはずだとおっしゃっていました」

こいつは、何を勘違いしているのだ。おそらく、その政治家は、理事長の交際費のことを言っているに違いない。

役員全体では、交際費は一億円に達するから、ひとりひとりから一〇〇万円程度を集めれば、確かに一〇〇〇万円ぐらゐの金は捻出できるかも知れない。

しかし、見ず知らずの国のために、貴重な交際費を削ろうなどという奇妙な人間がいるわけがない。そんな金があったら、銀座のホステスに貢いだ方が、はるかに自分たちのためになる。

どうせ、こいつらに渡しても、懐に入れられるだけである。民主政権などといっているが、政治家は、どこでも変わらない。

「ニチカワさん。それは、相談された政治家の方の勘違いだと思いますよ。いずれにしても、私の自由になる金は一銭もありません。それよりも、その政治家の方をお願いして、来年度の予算に組み入れるよう運動された方が賢明と思います」

ニチカワは残念だといわんばかりの顔だ。

「参考までに、お聞きしますが、あなたが相談された政治家はどなたです」

「民衆党の鳩川代議士です」

金井は、思わず笑ってしまった。なんだ、野党の代議士ではないか。そんなやつに頼んでも、予算がつく可能性はない。

しかし、そんなことはおくびにも出さず、金井はこう言った。

「それは、よい方に相談されました。鳩川先生は、与党にも影響力があります。いまから、陳情されれば、来年度の予算として認められる可能性が高いと思いますよ」

そういって、ニチカワの顔はいきなりほころんだ。

金井はほっとため息をついた。

これで、厄介払いができそうだ。

へたをすると、こいつは、毎日のように陳情に来るだろう。うまく鳩川に、面倒を押し付けることができた。

「それでは、ニチカワさん。わたしは、予定がつまっていますので、ここで失礼させていただきます。貴国が、立派な政権を樹立されることを祈っております。微力ですが、ご支

援させていただきますよ」

すると、ニチカワは

「金井理事長。お忙しいところ、大変貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございました」

そう言って、部屋を後にした。

多忙か。金井は思わず笑った。天下り役人に多忙な人間などいるわけがない。みな時間をもてあましてしているのだ。天下りの中には、はじめから職場には顔を出さず、給料だけ貰っているものがあるそうだが、金井には、そこまで大胆なことはできない。

その日。金井の予定はなかった。あるとすれば、夜の飲み会だけである。あとは、秘書が持ってきた新聞に目を通すぐらいだ。すると、机の電話が鳴った。

「おお、野中か」

年金企画財団に天下った友人の野中雄二からだった。

野中は、今日の飲み会は、料亭の福屋を予約したと伝えた。思わず、金井はにんまりした。福屋は、銀座ではなく、向島にある。格としては、かなり落ちるが、なにしろ、はでな女遊びができる。マスコミの目も、それほど厳しくない。確か、前は、花代として八〇万円要求されたが、野中が全額を払ってくれていた。

金井は、前回、野球拳で全裸にした若いコンパニオンの体を思い出して、思わず顔がほころぶのを抑えきれなかった。

そして、ふとNTS社長ポストのことを思い出した。自分が、一生懸命、動いたとして、何とかなるものではない。いまのところは、財産省に任せるしかない。いざとなったら、相川に頼んでみよう。何しろ、相川は大臣様である。

昼には、少し早いけど、秘書に命じて、近くの蕎麦屋から、特上のでんぶらそば定食を出前させることにした。五〇〇〇円もするが、これも財団の経費で落とすことができる。もちろん、備考欄には、懇談の相手としてニチカワの名前を記入した。

金井は、理事長室の冷蔵庫からキリンビールを一本取り出した。昼のビールはどうして、こんなにうまいのだろう。ただし、飲み過ぎはよくない。夜の宴席での酒がまずくなる。だから、昼のビールはいつも二本までとっていた。